おしゃべり美術部レター

Vol. 3
2025年10月25日
本郷新記念札幌彫刻美術館

【本郷新の言葉】
「人は山を愛する。山はいつ見ても気持のよいものである。人は海を愛する。海はいつも人の心をなぐさめるものである。山といい、海といい、自然のこの特別な大いさ、すなわち量は、いつもわれわれに感激をあたえ、われわれの精神を養ってくれる。（中略）彫刻は、この量の芸術である。彫刻家は、人間の手でつくった小さい形を通して、山のように高く、海のように深く、森のように静かに、またリンゴのように愛らしい精神のよろこびを人々にあたえるのである」―本郷新『彫刻の美』、一九四二年

おしゃべり美術部北海高校編！

鑑賞ワークショップ「札幌おしゃべり美術部」が令和七年十月二十五日（土）に本郷新記念札幌彫刻美術館で開催されました。美術作品の鑑賞をみんなでおしゃべりしながら楽しむ会で、最後は作品の解説文（批評）を書くことに挑戦するものです。

今回は彫刻家・本郷新の母校でもある北海高校の生徒5名が参加しました。4名が新聞局に所属しており、残りの1名は将来学芸員になりたいと考えている生徒です。美術に対する関心度はバラバラでしたが、全く問題ありません。おしゃべり美術部は「鑑賞は誰でもできる」ということを実感してもらう会なので、誰でも歓迎です。

なお、おしゃべり美術部のコンセプトや方法論につきましてはレター第一号に全て書いてありますので割愛します。確認したい方は左のQRコードからダウンロードしてください。

おしゃべり美術部レター Vol.1

おしゃべり美術部レター Vol.2

対話鑑賞→自由鑑賞→作品を一点選んで口頭発表→解説文の執筆…という流れで実施しました。所要時間は約2時間。美術館に来ること自体が初めての生徒や、彫刻をほとんど見たことがない生徒が居て、最初はどうやって見たら良いのか不安な様子だったのですが、鑑賞をするうちにだんだん慣れて、自分なりの感想を言えるようになっていきました。生徒の短時間での成長ぶりに、引率の先生方も驚かれていました。

参加者による批評

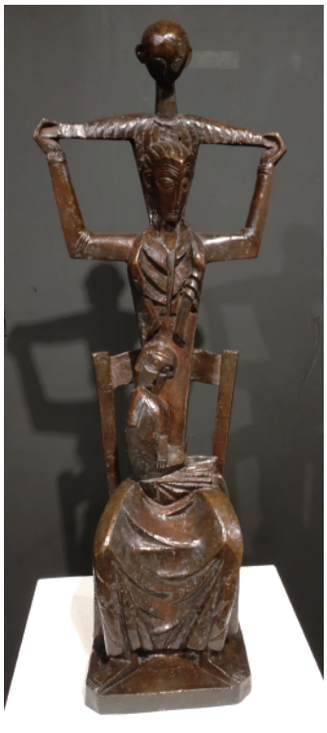
●母子

この作品は三人の人物が登場する。その中でも座っている母に注目すると、肩車をされている子の手を握っていたりひざの上に座らせている子が座りやすくなるように足を広げていたりしていることから、母は子ども思いな様子が伝わる。

しかし母の顔は目が下を向いていて少し疲れ切っているように感じる。子どものことを思いやりすぎて顔が暗くなってしまったのではないかと思った。

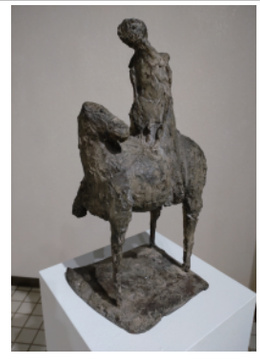
この作品からは三人の生活も予想できる。腕や身体の模様や解説パネルからこの三人はアフリカに住んでいると分かるし、身体が細いことからそこまで裕福ではないと予想できる。そして私はこの三人がアフリカに住んでいるから黒い材料を使ったのではないかと考えた。この作品は、三人の親子が椅子に座っている姿だけで人物の心情や生活の背景を読み取れる点で優れていると思う。（K・Yさん）

（参加者の批評は裏面に続く！）



ジャック・リプシッツ《母子》ブロンズ、1914年、札幌芸術の森美術館蔵

開催中の展覧会
「彫刻三昧」<本館>
2025.10.11-2026.1.4
ロダン登場から1990年代までに彫刻界をリードした国内外の作家たちの名品が勢ぞろい。



マリノ・マリーニ《騎馬像》ブロンズ、1943 年、札幌芸術の森美術館蔵

●騎馬像

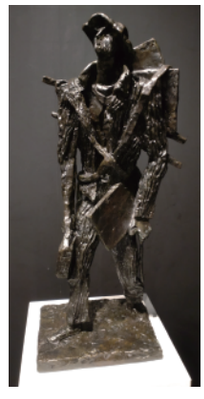
馬を見ると、一つの足としっぽがなくなっている。対して、馬に乗っている人は五体満足で、どこか欠けているようには見えない。このことから、馬のアンバランスで不利である感じが伝わってくる。また、何度も敵地に赴き、ボロボロになっていることも連想できる。

馬が騎手の方を見上げているが、見られている当の本人は、反対向きに顔を運ばせている。そして、向いている方向は、ちょうど影になっており、何か後ろめたいことがあるような印象を受ける。ここで私は、馬を何度も戦場に連れていくことの申し訳なさや、戦争に参加したくないという意志があるように思えた。

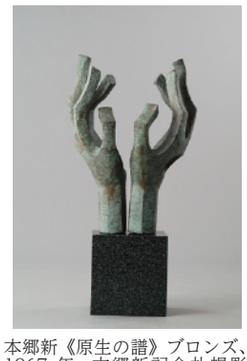
この作品から、私は戦争を繰り返してはいけないという作者からのメッセージがあると想像した。（M・Yさん）

●野原を歩くファン・ゴッホ

野原を歩くゴッホの姿は、手足が細く、服がくたくたになっていることから、すごく疲れているように感じた。口ひげが多く、長く旅をしながら絵を描いてきたことが伝わってきた。作品の色が黒色というところからあまり明るい印象ではなく、ゴッホが少し思いつめているようにも見える。杖を持っているがそれを使わず、少し前のめりになって歩く様子から自分の納得のいく作品のために歩く意志の強さなども感じられる。（N・Hさん）



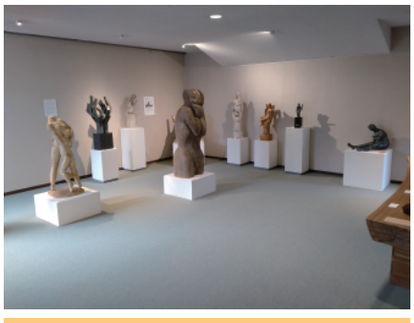
オシップ・ザッキン《野原を歩くファン・ゴッホ》ブロンズ、1956 年、札幌芸術の森美術館蔵



本郷新《原生の譜》ブロンズ、1967 年、本郷新記念札幌彫刻美術館蔵

●原生の譜

ブロンズでできたこの手。一見すると両手首を近づけて花を表現しているように見えるが、よく見ると微かな悲しみが感じ取れた。誰にでもできるこの簡単なポーズ。しかしこれは何かを求めている、すなわち懇願する姿を想像する。近くで見るとこの手は傷のような模様がつけられていることがわかる。さらに、手に開いた穴、物をつかむのが難しそうな指先からは、求めている物が手に入らないという人間の心情を感じた。手の傷と穴、そして心情からこの手の持ち主が身分の低い者なのではないかと考えた。（Y・Tさん）



開催中の展覧会
「コレクション展　2025-2026」
＜記念館＞
2025.5.31-2026.5.24
彫刻家・本郷新（1905-1980）がアトリエとして使用していた建物に、巨大な石膏原型など 68 点の彫刻を展示中。

●嵐の中の母子像

母と子二人が嵐から必死に逃げようとしている作品である。1歳ほどの子は、母の右腕に支えられており、もう一方の6歳ほどの子は、母の背中に乗ろうとしている。そして、母は右足を前に出し、左手で後ろの子を支えようとしている。右足をよく見ると、第一関節からつま先の指が床を蹴ろうとしているように見える。自分の子ども二人を必死に守っているのだろう。母に抱かれている子は、母の手一本だけでは足りず、落ちそうになっている。そのため、両足を母の左足に押すことで、水平状態を保とうとしている。母の背中に乗ろうとしている子は、もう嵐の怖さを知っているかのように急いで乗ろうとしているのがわかる。母の体制は子ども二人のために踏ん張ろうとしているが、表情にはまったく焦りを見せない。母の強さと家族の絆が感じられる作品だ。（M・Kさん）

本郷新《嵐の中の母子像》石膏、1953 年、本郷新記念札幌彫刻美術館蔵

実践を終えて

北海高校の先生の御協力により、初めて高校生相手におしゃべり美術部を実施することができました。ありがとうございます。特段美術に関心のある生徒でなくても、途中から鑑賞のコツをつかんで楽しんでくれたようです。これで美術館に出かけるハードルがぐっと下がったのでは？

美術館学芸員は、来館者の需要に答えるだけでなく、「需要を育てる」こともしていかなければならないと考えています。これからも「美術鑑賞が趣味です！」という人を増やしていきます。

おしゃべり美術部顧問
梅村尚幸
（本郷新記念札幌彫刻美術館学芸員）